



極地研ニュース122

1994年10月

第36次南極地域観測隊の概要

上 田 豊

第36次南極地域観測隊は、1994年11月14日に、35次隊とおなじ越冬隊40人、夏隊16人、計56人で晴海を出港する。他に交換科学者として、ドイツから1人参加する。越冬隊長は、これで5回目の越冬となる召田成美氏、また越冬副隊長を4回目の越冬となる石沢賢二氏がつとめる。夏・冬ともに隊長は国立極地研究所外からの参加となる。今回は、男だけの隊で、全体の平均年齢（1994年末時）は35.6才、越冬隊のみでは34.8才である。越冬隊員のうち越冬経験者は11人で、最近10隊の平均8.5人より、26次、28次隊とならんで多い。

第36次隊も、例年のように盛りだくさんの定常観測と研究観測の計画がある。定常観測は、近年急速に高まった地球環境への関心のもと、日本から南極域までの地球縦断にちかい測線上と南極域での通年定点における地球環境の長期モニタリングとして、重要度が増してきている。

第36次隊の主な研究観測では、気水圏系の「氷床ドーム深層掘削観測」がある。32次隊からこの計画のための内陸への物資輸送が始まり、33次隊でドームふじ頂部の精査、34次隊では112m深のパイロット孔掘削と2棟の建設、35次隊で基地設備の大部分が形をととのえる。36次隊ではこの高度3810m、77°19'S、39°42'Eのドーム頂上で初の越冬を開始し、掘削場、掘削機器の整備ののち、1000m深突破の掘削をめざす。これは37次隊にひきつがれ、2000m深をこえる氷コア試料から過去20万年、前々回の氷期に届く気候・環境復元が期待される。

「ドームふじ」は、エンダービーランドの頂上で、南極氷床ドームで2番目に高い。今回は、南極では最高所の越冬となり、年平均気温-60℃、最低気温は-90℃におよぶ可能性もある。越冬メンバーは、東信彦隊員をリーダーに、雪氷4人、気象（兼通信）1人、機械2人、調理、医療各1人の計9人である。冬明けには、昭和基地からドーム物資補給隊が出る予定である。

宙空系では「太陽エネルギー輸送と変換過程に関する総

合研究」がある。この研究では、太陽エネルギーが地球に流入する過程とそのメカニズムや影響を、オーロラ現象の観測を中心に解明をはかる。36次隊では、オーロラ光のスペクトル、強度、発光高度およびオーロラ粒子の2次元分布を観測する。

地学系では「第Ⅱ期東クイーンモードランド地域の地学研究」がある。ここでは、東南極大陸における地殻動態と地殻形成過程を総合的に研究する。36次隊では、昭和基地において超伝導重力計やGPSによる連続観測などで地殻動態を監視し、夏にはエンダービーランドを中心に、先カンブリア時代の大陸地殻形成過程を調査する。

生物系では「海水圏生物の総合研究」により、海水域の季節変動が気候・環境・生物圏に与える影響の解明をめざしている。以上にあげた気水圏、宙空、生物系の研究は5年計画、地学系は8年計画で、いずれも次の37年次隊が最終年度となる。

設営関係では、建設後、約30年を経過した昭和基地の施設更新を平成3年度からの8年計画で実施中である。36次隊では通路棟、倉庫棟基礎その他、35次隊で「しらせ」が接岸できなかったための年次計画のおくれを含め、延べ約1500人日の建設作業がある。これには、宙空系の大型短波レーダーのアンテナ設置も組み込まれている。

第35次隊の海水状況は近年最悪であり、「しらせ」の昭和基地接岸は今回も保証されていないが、まず夏の輸送を成功させ順調なスタートをきりたい。総物資は約1080t。そのうち80tはドームへ向かう物資で、年末にはS16へ空輸し、ドーム越冬隊員と3名の支援隊員は1000km内陸のドームFへ向かう。現地で9名の35次ドーム隊員と合流してドーム越冬成立を確認し、支援隊員と35次隊員は2月上旬S16に戻る。

数えきれない方々のご支援でここに至ることができ、感謝している。あとは「しらせ」とともに全員が協力しあって、無事に満足のいく成果をあげてきたい。

（筆者：第36次南極地域観測隊長、

名古屋大学大気水圏科学研究所教授）

■国立極地研究所発行 ■〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10 ☎(03)3962-4712

1994年10月20日発行 隔月1回20日発行

フリチョフ・ナンセン記念講演会を開催

10月14日午後、ノルウェー王国大使館との共催で、駐日ノルウェー王国、ヨン・ビョルネビー大使御出席の下、「フリチョフ・ナンセン記念講演会」が、本研究所講堂において開催された。

この講演は、北極探検や国際連盟及び赤十字活動において偉大な功績を残したノルウェー王国の科学者フリチョフ・ナンセンを記念し、在外ノルウェー王国大使館が、同国と関係の深い機関を選び共同で特別記念講演会を毎年世界の数箇所において開催しているものである。

本研究所は、ノルウェー王国の関係研究機関との間で、南・北両極域における観測研究を通じ、研究者の活発な交流等を行っており、この度の特別講演会の開催となった。

今回の講演では、ノルウェー極地研究所 太田 昌秀首席研究員の「フリチョフ・ナンセンについて」のプロローグの後、北極点、南極点、エベレストのいわゆる世界三極をきわめた世界的に著名なノルウェー人探検家、アーリン・カッゲ氏が「極地から極地へ」と題した講演を、また、本研究所 山内 恭 教授が、「観測から見た南極と北極」と題した講演を、英語により行った。

講演会に続いて、ノルウェー王国大使主催のレセプションが開催され、講演者を囲み、なごやかな歓談が行われた。出席者は、カッゲ氏の快挙を讃え、日本・ノルウェー両国の国際協力による極域環境研究推進の重要性を再確認した。



ヨン・ビョルネビー大使の挨拶

「講演と映画の会」開催される

国立極地研究所が主催する「講演と映画の会」が、いわき市教育委員会との共催、福島県教育委員会の後援のもとで9月7日（水）に、いわき市文化センターで開催された。

9年目を迎えた今回の「講演と映画の会」は、同市出身の江尻全機教授（情報科学センター長）が、「南極の自然と観測隊」という演題で、南極から見た地球環境を中心に講演した。



講演中の江尻教授

講演の前に、同市の小学生、中学生、高校生の代表3名が、昭和基地と電話による交信をおこなった。衛星回線がつながり、「こちらは昭和基地です」という横山隊長の声が会場に流れると、大きな歓声があがった。

今回の「講演と映画の会」は、いわき市教育委員会の全面的なバックアップを得たことから、定員580名の会場では、立ったまま講演を聞いている人も多く、入場者の記録を大きく塗り替えた。



昭和基地との電話交信

第35次越冬隊員の家族会開かれる

現在越冬中の第35次越冬隊員の家族会が9月22日（木）横山会長の主催により本研究所講堂で開催され、22家族42名の参加があった。また出発準備に忙しい第36次石沢副隊長も出席した。

会は横山会長のあいさつに始まり、平澤企画調整官の留守家族の方へのねぎらいの言葉と、出席家族からは、近況などもまじえた自己紹介があり、なごやかな雰囲気包まれた。

事業課からは越冬隊の今後の日程や託送品の送り方などについて説明し、また、今年3月に帰国した第35次夏隊が撮影した記録フィルムを集め、出港から夏期オペレーション中の各隊員の様子をスライドで披露した。



第35次越冬隊員の留守家族

▶ 外国人研究員の紹介 ◀

氏 名 イボン ル マオ
(Yvon Le Maho)
外国人研究員
所 属・職 CNRS国立生態学・生理エネルギー学研究
所・所長
招へい期間 平成6年9月16日～12月15日
研 究 課 題 肺呼吸生物の水中行動時のエネルギー代謝の
生理学的研究

平成6年9月30日付け人事異動 退 職

森 基 榮 (事業部長)

平成6年10月1日付け人事異動 転 入

野 木 義 史 助手研究系・地学研究部門
(気象庁気象研究所)

昇 任

福本 國 太 郎 事業部長
(長崎大学庶務部庶務課長)

採 用

三 浦 英 樹 助手研究系・地学研究部門
石 井 要 二 管理部庶務課人事係

研究出版物

南極資料 Vol. 37, No. 2(July 1993, p.115-203)
Vol. 37, No. 3(November 1993, p.205-371)

Vol. 38, No. 1(March 1994, p.1-111)

Memoirs of National Institute of Polar Research,
Special Issue, No. 49: Ice Drilling Technology; Pro-
ceedings of the Fourth International Workshop on
Ice Drilling Technology, Tokyo, April 20-23, 1993,
ed. by O. Watanabe. 408p. March 1994

Proceedings of the NIPR Symposium on Upper Atmo-
sphere Physics
No. 7, 90p. February 1994

Proceedings of the NIPR Symposium on Polar Mete-
orology and Glaciology
No. 7, 126p. September 1993

Proceedings of the NIPR Symposium on Antarctic
Geosciences
No. 6, 147p. October 1993

Proceedings of the NIPR Symposium on Antarctic
Meteorites
No. 6, 427p. May 1993
No. 7, 309p. March 1994

Proceedings of the NIPR Symposium on Polar Biology
No. 7, 310p. January 1994

JARE Date Reports

No. 192(Seismology 27): Seismological bulletin of
Syowa Station, Antarctica, 1992, by M. Kanao.
69p. January 1994.

No. 193(Upper Atmosphere Physics 11): Upper
atmosphere physics (UAP) data obtained at Syowa
and Asuka Stations in 1991, by R. Fujii et al.
208p. March 1994

No. 194(Glaciology 21): Glaciological data collected
by the 33rd Japanese Antarctic Research Expedi-
tion in 1992, by K. Kamiyama, T. Furukawa, H.
Maeno, T. Kishi and M. Kanao. 67p. March 1994.

No. 195(Ionosphere 51): Records of radio aurora at
Syowa Station in 1992, by M. Kamata and K.
Igarashi. 151p. March 1994

No. 196(Ionosphere 52): Radio observation data at
Syowa Station, Antarctica during 1992, by M.
Kamata and M. Kunitake. 202p. March 1994.

No. 197 (Ionosphere 53): HF field strength data
measured at Syowa Station, Antarctica from Jan-
uary to December, 1992, by M. Ichinose and M.
kamata. 17p. March 1994.

No. 198 (Oceanography 15): Oceanographic data in
Luützow-Holm Bay of the Antarctic Climate
Research Program from January 1991 to February
1992 (JARE-32), by K. I. Ohshima and T. Kawa-
mura. 35p. March 1994.

Antarctic Geological Map Series

Sheet36: Ongul Islands, 1/10000, with explanatory text, by H. Ishikawa et al. 21p. with 6 pl. March 1994.

永年勤続者表彰

平成6年度の永年勤続者表彰式が、9月28日に所長室において行われ、森 基泰事業部長と外内 博事業課企画係主任に、それぞれ星舎所長より表彰状の授与と記念品(銀杯)の贈呈がなされた。



表彰を受ける森事業部長



表彰を受ける外内企画係主任

▶ 来訪者 ◀

10月4日～10月11日 Prof. ULLALAN D. S. (ベルゲン大学教授)

10月8日 Dr. OVERVAAG, H. (トロムソ大学学長)
Prof. BREKKE, A. (同教授)
Prof. VORREN, T. O. (同教授)

Dr. BRAATHEN, G. O. (ノルウェー大気研究所研究員)

10月18日～10月23日 Dr. BARONI, C.
(ピサ大学助教授)

10月19日～10月23日 安 仁英 (Dr. Ahn In-Young)
(韓国 海洋研究所研究員)

Dr. MCMINN, A. (タスマニア大学研究員)

10月19日～10月24日 張 青松 (Prof. Zhang Qing-song)
(中国科学院地理学研究所教授)

10月25日 Dr. LE GUERN, F. (フランス国立科学研究所センター研究員)

10月31日～11月4日 枕 文雄 (Mr. Shen Wenxiong)
(中国科学院中国自然科学基金委員会副秘書長)

顧 明達 (Prof. Gu Mingda) (同国際合作局長)

陸 則慰 (Dr. Lu Zewei) (同地球科学部大気学科主任)

林 海 (Dr. Lin Hai) (同地球科学部大気学科副主任)

王 逸 (Mr. Wang Yi) (同国際合作局プロジェクトマネージャー)

観測隊だより

10月に入って急に春めき、最高気温が -10°C 以上の日も目立ち始め、月末には盗賊かもめやアデリーペンギンが昭和基地を訪れるようになった。天気は短い周期で変化し、2度のブリザードがあったものの、全般に穏やかな1カ月であった。

基地では野外活動が活発になり、10月8日には先陣を切って地学・宙空部門が21日間の日程で宗谷海岸の調査に出発し、引き続き10月11日には夏ドームF旅行隊、23日にはブル隊がドームFに向けて昭和基地を出発した。ドームF関連旅行の出発に先駆け、S16への機荷揚げや雪上車整備のため5度の旅行も行われた。また、アデリーペンギンの個体数調査や12月に予定されている、やまと山脈地学調査のための、航空機による物資輸送も始まった。

ドームF関連旅行隊が出発することにより、基地に40名全員が集うのも、今月が最後となった。これに伴い、10月2日には冰山そうめん流しとバーベキューパーティーが基地近くの冰山で行われた。10月10日には福島ケルン慰霊祭が開催され、越冬前半の無事を感謝し、後半の全員の健康と観測の成功を祈った。月末には少人数体制での防火訓練が行われ、越冬終了まで防火を誓いあった。

基地では旅行隊が出発した後の少ない人数で重機をフル稼働させ、36次隊受け入れのため、除雪が休日返上で行われている。また、陽が長くなった昭和基地では、夕食後魚釣りが盛んに行われるようになってきた。

第36次南極地域観測隊員名簿

○越冬隊

平成6年10月20日現在

担 当	氏 名	生年月日 (昭和)	所 属	本 籍	隊 経 験 等
副 隊 長 (兼越冬 隊長)	召 田 成 美	19. 10. 24	気象庁観測部 (運輸技官)	長 野 県	第16・20・26・30次 越冬隊
副 隊 長 (兼越冬 副隊長)	石 沢 賢 二	27. 9. 16	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	第19・24・32次越冬 隊, 第28次夏隊
気 象	佐 藤 尚 志	33. 6. 18	気象庁観測部 (運輸技官)	福 島 県	
〃	吉 見 英 史	37. 6. 22	気象庁観測部 (運輸技官)	兵 庫 県	
〃	竹 川 元 章	37. 9. 16	気象庁観測部 (運輸技官)	山 梨 県	
〃	宮 内 誠 司	38. 11. 25	気象庁観測部 (運輸技官)	北 海 道	
〃	中 村 辰 男	39. 3. 5	気象庁観測部 (運輸技官)	東 京 都	
電 離 層	稲 森 康 治	32. 7. 25	郵政省通信総合研究所企画部 (郵政技官)	三 重 県	第28次越冬隊
地球物理	田 中 俊 行	44. 2. 15	国立極地研究所事業部 (文部技官)	三 重 県	
宙 空 系	有 澤 豊 志	23. 8. 26	電気通信大学電気通信学部 (文部技官)	高 知 県	第32次越冬隊
〃	加 藤 泰 男	28. 3. 1	名古屋大学 太陽地球環境研究所 (文部技官)	愛 知 県	
〃	大 高 一 弘	36. 5. 5	郵政省通信総合研究所宇宙科学部 (郵政技官)	東 京 都	第31次越冬隊
地 学 系	丸 山 一 司	33. 7. 9	建設省国土地理院測地部 (建設技官)	新 潟 県	
〃	青 山 雄 一	45. 5. 11	国立天文台地球回転研究系 (文部教官 助手)	長 野 県	
気水圏系	中 山 芳 樹	20. 1. 1	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	第24次越冬隊
〃	田 中 洋 一	26. 4. 19	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	
〃	東 信 彦	29. 12. 12	長岡技術科学大学工学部 (文部教官 助教授)	北 海 道	第30次越冬隊
〃	亀 田 貴 雄	38. 5. 7	北見工業大学工学部 (文部教官 助手)	群 馬 県	
〃	藤 原 淳 一	39. 2. 25	郵政省四国電気通信監理局電波監理部 (郵政技官)	愛 媛 県	
〃	森 本 真 司	41. 9. 26	国立極地研究所 北極圏環境研究センター (文部教官 助手)	兵 庫 県	
生 物 学 系	伊 村 智	35. 5. 9	国立極地研究所研究系 (文部教官 助手)	栃 木 県	
機 械	中 西 実	31. 7. 25	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	第28次越冬隊
〃	佐 藤 仁	35. 10. 9	国立極地研究所事業部 (文部技官)	新 潟 県	第32次越冬隊
〃	市 川 一 男	36. 9. 25	山梨医科大学業務部 (文部技官)	長 野 県	
〃	寺 田 俊 孝	37. 6. 10	国立極地研究所事業部 (文部技官)	石 川 県	
〃	中 村 吉 夫	40. 8. 23	国立極地研究所事業部 (文部技官)	北 海 道	
〃	齋 藤 雅 彦	41. 6. 1	国立極地研究所事業部 (文部技官)	福 島 県	
〃	濱 片 正 和	44. 9. 17	国立極地研究所事業部 (文部技官)	石 川 県	
通 信	永 原 文 雄	18. 4. 19	国立極地研究所事業部 (文部技官)	千 葉 県	第20・30次越冬隊
	中 本 栄太郎	39. 9. 8	海上保安庁警備救難部 (海上保安官)	山 口 県	

○越冬隊

担 当	氏 名	生年月日 (昭和)	所 属	本 籍	隊 経 験 等
調 理	藤 沢 正 孝	24. 2. 14	国立極地研究所事業部 (文部技官)	長 野 県	第30次越冬隊
〃	高 坂 浩	42. 10. 30	海上保安庁警備救難部 (海上保安官)	北 海 道	
医 療	米 井 徹	36. 3. 5	鳥取大学医学部付属病院 (医師)	岡 山 県	
〃	松 岡 洋一郎	39. 2. 3	国立極地研究所事業部 (医師)	東 京 都	
〃	西 野 潔	40. 9. 5	国立極地研究所事業部 (医師)	高 知 県	
廃 棄 物	安 達 雄 治	41. 2. 8	電気通信大学施設課 (文部技官)	新 潟 県	第33次夏隊
設営一般	高 橋 暁	23. 8. 10	国立極地研究所事業部 (文部技官)	京 都 府	
〃	本 多 実	23. 10. 7	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	
〃	田 中 修	35. 12. 28	東京学芸大学庶務部 (文部事務官)	東 京 都	
〃	金 子 昌 幸	43. 2. 27	国立極地研究所事業部 (文部技官)	東 京 都	

○夏 隊

担 当	氏 名	生年月日 (昭和)	所 属	本 籍	隊 経 験 等
隊 長 (兼夏隊長)	上 田 豊	18. 9. 26	名古屋大学大気水圏科学研究所 (文部教官 教授)	兵 庫 県	第10・26次越冬隊
海洋物理	寄 高 博 行	36. 9. 16	海上保安庁水路部 (海上保安官)	東 京 都	第34次夏隊
海洋化学	並 木 正 治	39. 8. 20	海上保安庁水路部 (海上保安官)	埼 玉 県	第19・26次越冬隊
海洋生物	野 村 潔	23. 8. 7	北海道大学水産学部 (文部技官)	北 海 道	
測 地	山 本 宏 章	38. 9. 18	建設省国土地理院測地部 (建設技官)	福 岡 県	
宙 空 系	山 岸 久 雄	24. 10. 11	国立極地研究所研究系 (文部教官 助教授)	東 京 都	
地 学 系	有 田 正 志	27. 12. 17	広島大学附属中・高等学校 (文部教官 教諭)	愛 媛 県	
〃	川 野 良 信	37. 5. 6	佐賀大学教育学部 (文部教官 講師)	福 岡 県	第29・33次越冬隊
〃	内 藤 一 樹	43. 8. 23	通商産業省工業技術院地質調査所 (通商産業技官)	静 岡 県	
気水圏系	古 川 晶 雄	36. 7. 30	国立極地研究所研究系 (文部教官 助手)	愛 知 県	
生 物 ・ 医 学 系	緑 川 貴	28. 11. 1	気象庁気象研究所地球化学研究部 (運輸技官)	栃 木 県	
設営一般	増 田 光 男	22. 10. 25	国立極地研究所事業部 (文部技官)	千 葉 県	
〃	川久保 守	25. 2. 27	国立極地研究所事業部 (文部事務官)	長 野 県	第24・27・30・32・ 33・35次夏隊
〃	福 井 均	29. 3. 19	国立極地研究所事業部 (文部技官)	京 都 府	第20・26次越冬隊 第30次夏隊
〃	和泉澤 統一	33. 4. 7	国立極地研究所事業部 (文部技官)	神奈川県	第35次夏隊
〃	矢 野 幸 男	46. 3. 18	国立極地研究所事業部 (文部技官)	愛 媛 県	

外国基地派遣者等名簿

○外国共同観測（中国・中山基地）

専門分野	氏 名	生年月日 (昭和)	所 属	本 籍	隊 経 験 等
大 気 物 理 学	青 木 周 司	29. 10. 8	国立極地研究所研究系 (文部教官助手)	茨 城 県	第29次越冬隊
磁気圏物理学	菊 地 雅 行	40. 6 .12	国立極地研究所研究系 (文部教官助手)	岩 手 県	

○南極条約に基づく交換科学者（派遣）（米国・マクマード基地）

専門分野	氏 名	生年月日 (昭和)	所 属	本 籍	隊 経 験 等
磁気圏物理学	江 尻 全 機	17. 4 . 30	国立極地研究所 情報科学センター (文部教官教授)	東 京 都	第25・30次 越冬隊

○南極条約に基づく交換科学者（受入）

氏 名	生年月日 (昭和)	所 属 ・ 職	研 究 目 的
Gunter Schwarz	1949. 3. 12	ドイツ極地海洋研究所・研究員	南極における大気中の水蒸気及び降雪 中の重水素時空間変動の観測

南極月別気象状況（Monthly Climatic Data for Japanese Antarctic Station）

昭和基地

(Syowa : 89532)

	9 月 (Sep.)	10 月 (Oct.)
平均気温 (Mean temp.) (°C)	- 17.2	- 12.3
最高気温 (Max. temp.) (°C)	- 4.6	- 5.1
最低気温 (Min. temp.) (°C)	- 30.2	- 26.2
平均気圧・海面 (Mean pressure, sea level) (hPa)	985.7	982.2
平均蒸気圧 (Mean vapour pressure) (hPa)	1.0	1.6
平均相対湿度 (Mean relative humidity) (%)	55	61
平均風速 (Mean wind speed) (m/s)	6.1	6.6
最大風速・10分間平均 (Max. wind speed, 10-min. mean) (m/s)	28.7(20日, ENE)	34.4(20日, NE)
最大瞬間風速 (Gust) (m/s)	35.3(20日, ENE)	42.8(20日, NE)
平均雲量 (Mean cloud cover) (1/10)	6.1	6.6
快晴日数 (Number of clear days)	9	3

【極地豆事典】

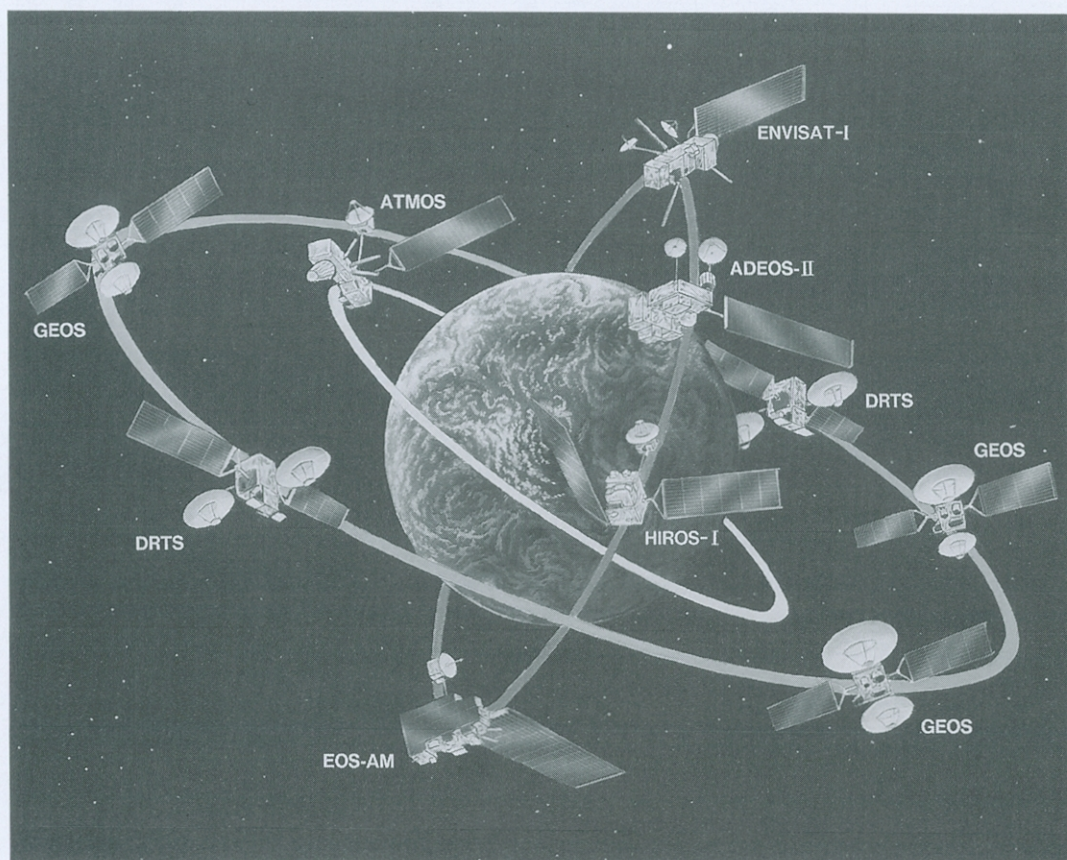
地球観測衛星計画

1987年の海洋観測衛星 (Mos) - 1 の打ち上げで始まった我が国の宇宙開発事業団を中心とする地球観測衛星計画は、近年の地球環境問題の高まりと共に発展し、今や世界中から注目される大計画になっている。地上の観測点の少ない極域では特に衛星観測の威力が発揮できるため、極域の観測研究には大きな期待がよせられている。昭和基地でも、大型アンテナ (多目的衛星データ受信システム) によって MOS-1/1b のほか、合成開口レーダ (SAR) を搭載したヨーロッパ・リモートセンシング衛星 (ERS) - 1、日本の地球資源衛星 (JERS) - 1 の受信が続けられている。

将来の計画としては、1996年の打ち上げが予定されている極軌道プラットフォーム技術衛星 (ADEOS; アメリカ NASA, ヨーロッパ ESA でも類似の計画で共同して観測しようというもの; 図参照) をはじめ、さまざまな衛星が計画されている。ADEOS では成層圏オゾンをはじめとした極域の大気微量成分の観測をねら

う ILAS, オゾン全量を測る TOMS, 海上の風を測る散乱計 NSCAT, 海色を測る OCTS, 高分解能画像データを得る AVNIR 等の測器が搭載され、地球温暖化やオゾン を主テーマに観測が計画されている。1997年には、日周変化をねらい軌道が傾いているため極域は見えないが、降雨レーダを搭載した TRMM (熱帯降雨観測ミッション) 衛星が打ち上げられる。その後、水蒸気、雲、氷を見るマイクロ波放射計 AMSR や海色、陸上植生、雪氷、雲を見る可視赤外放射計 GLI 等を搭載する ADEOS-II, 新しい合成開口レーダや高分解能画像を見る陸域観測技術衛星 ALOS, さらに降雨、雲や放射収支、大気化学をねらう ATMOS シリーズ等が計画されている。

多くの衛星計画が華やかな中、これまでのロケットや衛星の技術中心主義から観測対象に重点を置くべく「地球環境観測委員会」が作られ、多くの科学者の意見が反映されるような体制作りが進められている。この中では、大気圏化学、雲・エアロゾル・放射収支、大気・海洋大循環、極域・雪氷圏、海洋生物過程、水文過程、植生環境、固体地球等をテーマにした分科会が意見の集約に活動している。



将来の地球観測衛星計画。我が国の ADEOS-II, HIROS-I (ALOS に変更), ATMOS, アメリカの EOS-AM, ヨーロッパの ENVISAT の他、データ中継衛星 (DRTS) や静止軌道衛星 (GEOS) がみられる。